

生活単元学習の中での活用事例

～幼稚園児との交流を通して育まれた学び～

京都市立翔鸞小学校 竹内裕子

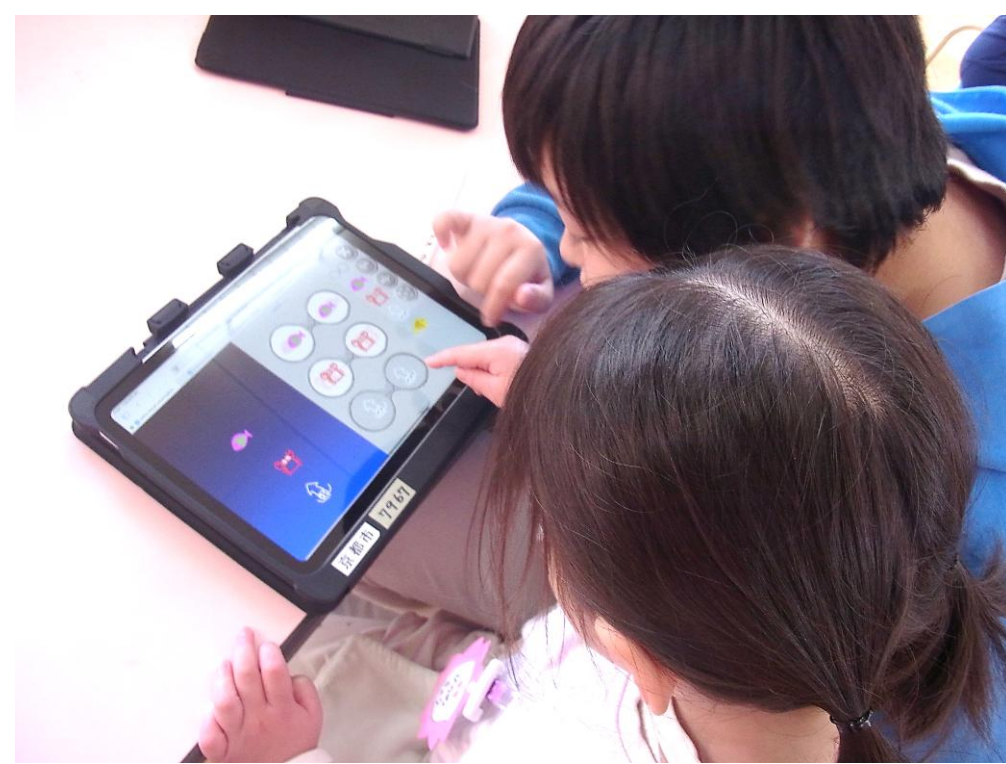
共同実践者 藤井陽子（翔鸞小）、松田あゆみ（翔鸞幼稚園）

背景・実態

本実践は、令和7年度に支援学級で行った取組である。本学級は1年生から6年生までの10名で構成されており、多くの児童が知的発達やコミュニケーションに課題を抱えている。自分の思いや考えを伝えたり、相手を意識して関わったりすることに難しさが見られる一方、幼稚園児に対しては「教えてあげたい」「喜んでもらいたい」という思いをもちやすい姿が見られた。そこで、ビスケットを活用した幼稚園児との交流を通して、相手を意識して関わる力や表現する力を育むとともに、自己有用感の向上を目指して実践を行った。

生活単元学習

本単元は、生活単元学習「みんなで楽しもう！②」として実践した。本学級ではこれまで、自立活動の中で、友達とコミュニケーションを取りながら手順を守って操作する学習にビスケットを活用してきた。本単元では、その経験を生かし、幼稚園児との交流を学習のゴールに設定した。交流会後には図工展での上映・鑑賞も位置付け、表現したものを人に伝えたり、一緒に楽しんだりする学びへと発展させた。



ビスケットがつないだ「表現」と「コミュニケーション」



動いたのは 絵だけでなく 心

準備

交流会に向けて、児童はどんな世界（ランド）なら楽しんでもらえるかを話し合い、「森」「まち」「宇宙」の三つのテーマを考えた。園児へのアンケート結果を基に内容を決定した。また、リハーサルを通して「あらかじめ部品を準備しておくとい」「おべんとうばこや動かし方の練習も必要」などの意見が出され、園児に分かりやすく伝えるための工夫を考えながら準備を進めた。



交流会 1 回目

交流会では、支援学級児童が園児の隣に座り、絵の描き方や操作方法を説明しながら一緒に作品を制作した。「〇だけでもいいよ」と声を掛けたり、自分でやって見せたりする姿が見られ、児童は安心して園児を支援していた。機材トラブルのため鑑賞時間を十分に確保できなかったものの、園児の「できた」「動いた」という声に励まされながら、子どもたちは一緒に作品を作る過程そのものを楽しんでいた。

交流会 2 回目

1回目の交流会では機材トラブルにより十分な交流や鑑賞の時間を確保できず、児童・指導者ともに満足のものとはならなかった。そこで2回目の交流会を企画し、小学校の教室に園児を招いてクリスマス会を実施した。ハンドベルによる「きよしこの夜」の演奏で園児を迎えた後、「まち」をテーマにビスケットランドを楽しんだ。園児も2回目で慣れてゆつたりと活動できた。



子どもの変容

交流を通して、児童は園児を「にじ組さん」ではなく「〇〇さん」と名前前で呼ぶようになり、相手を意識した関わりが見られるようになった。また、「また一緒にやりたい」という声も聞かれ、継続的な関わりへの意欲が高まった。普段は教わる立場の多い児童が教える経験を通して自信をもち、自己有用感の向上にもつながった。



ビスケットと表現

ビスケットは創作の自由度が高く、児童は自分で選んだ色や描いた形、線に強い愛着をもって取り組んでいた。また、「〇〇さんが描いた丸だよ」と友達や園児の表現も大切にする姿が見られた。めがねを使って意図的に動きをつくる面白さと、予想以上の動きが生まれる驚きの両方があり、集中して楽しみながら表現やコミュニケーションを深めることができた。



図工展

交流会で制作した作品や個人の作品を図工展で上映した。園児や全校児童と一緒に鑑賞する機会を設けたことで、作品づくりで終わらない学びへと発展した。また、「すごいね」「どうやって作ったの？」といった声が自己有用感の向上につながった。



まとめ

本実践を通して、児童は園児を「にじ組さん」ではなく「〇〇さん」という一人の相手として意識し、相手に合わせて関わる姿が見られるようになった。また、教える立場を経験することで自信や自己有用感を高めることができた。ビスケットは、自由な表現を楽しみながら他者との関わりを生み出す教材として有効であった。今後も、ビスケットのように創造性を発揮できる教材や学習を取り入れながら、子どもたちが自分らしく表現し、人と関わりながら社会の中で生きていく力を育んでいきたい。